説教要旨『この方を知らなかった』

ヨハネによる福音書１章２９～３４節

洗礼者ヨハネはイエスのことを、「世の罪を取り除く神の小羊だ」（29 節）と証しています。「小羊」とは、当時のユダヤ教祭儀において、人間の側が罪の赦しを求めて神に献げる犠牲の動物のことです。すると、ヨハネの言う「神の小羊」とは、神の側が差し出す犠牲の小羊のことですから、従来とは方向が全く逆であることが分かります。それは何も、神の側に罪があって、その赦しを人間の側に求めているということではありません。神が差し出す小羊、すなわちイエスの犠牲を通して、人間の側に赦しを示そうとしていることを象徴しています。

さて、本日の箇所で記される「水による洗礼」は、そもそも「汚れを清める」ためのユダヤ教の儀式でした。その洗礼は、「汚れ」に値しないとされた人には必要のないものでした。ところが、ヨハネが授けていた洗礼は違います。「汚れ」とは、表面的なことではなく、人間に内在する罪によって生まれるものであり、誰しもが例外なくその罪を告白し、神の前に向き直す「悔い改めの洗礼」が必要だと訴えていたのです。そして、その罪への目覚めを条件として、神の赦しを請う大切さを説いたのでした。しかし、ヨハネがイエスを通して見たのは、罪を告白する前から、既に自分達を赦そうとしておられる神の姿でした。「自分達ははじめから、大いなる愛に赦されて生きている」ことに、ヨハネは気づかされていったのです。しかし、その有り難さは、自分の罪に対する深い目覚めなしには感じることが出来ません。罪の悔い改めを迫るヨハネの洗礼は、赦されて生きている、まさにその恵みをこそ受け取るための器を作り出す役目を果たしていたのだとヨハネ福音書は捉えています。

私たちの愛には、しばしば条件が付きまといます。その愛は、知らぬうちに、その条件に当てはまらない人を追い込み、傷つけます。また、愛への見返りを期待し、それが得られないと憎しみに変わることもよくあります。そして、その誰かを傷つけてしまった体験を通して、私たちは愛すること、赦すことの深みを学ばせてもらってきたという矛盾も抱えています。そんな身勝手な私たちに証できることがあるとすれば、それでもなお「赦されることの少ない者は、愛することも少ない」（ルカ 7:47）と言ってくださる神の愛です。「この方を知らなかった」ことへの虚しさと、「この方を知った」時の恵みを語り継ぐことです。自分の罪深さに目覚めていくが故に痛み知っていく神の赦しの有り難さ…その恵みをこそ証する歩みを積み重ねていきたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）